

答えはすべて解答らんに入れない。

桜 一 次のⅠ・Ⅱの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

Ⅰ 三匹の猫を飼っている。猫にはとにかく驚かされることばかりだ。こちらの精神状態がよければ彼らは限りなくリラックスし、外出が続いたり忙しくてかまてあげられなくなったりすると、途端にグしてわるさをする。苛々している時は、わざと私の足を踏んつけて歩いたりもする。押し入れからぐぐぐ(注①)を取り出して旅行の(注②)をし始めると、不機嫌になって、一晩家出をしたり抗議の(注③)をしたりする。私の状態や行動に即座に反応を示す。猫の立場に立って、そこから見える世界を想像してみると、自分が見ている世界のおそろそそがあまり出ていることがある。

ある日、ライオンの子育て番組を見ていた時のことだ。画面にはしましまを襲ったライオンが肉を食いつまんでいるシーンが映し出されていたが、二匹の猫はテレビの前に寝そべり、映像には目もくれず、互いの体を舐めあっていた。

彼らは時としてテレビに敏感に反応する。テレビで生まれたばかりの仔猫の様子を映していた時、出産経験のある「しろ」は、テレビから流れてくる仔猫の鳴き声を聞くや否や、ひげをびくびく動かして「うるうる」と鳴き、テレビの後ろに仔猫を探しに行った。時々小鳥やねずみを手土産に持ち帰る狩りの名手、「ゆき」は、画面が鳥の群れを映し出した途端、テレビに飛びついて鳥を捕まえようとした。しかしオリーブの時には斜面を猛スピードで降りてくる滑降の選手に飛びついていたり、サッカーの試合を見ている時は右へ左へ転がるボールを選手と一緒に追いかけていたから、あまり物事を深く考えて行動しているわけではなさそうだ。

そんな彼らが、百獣の王であり、自分と同じ科に属するライオンの声や映像にはまったく反応を示さない。それが私にはとても奇妙に映った。

彼らは、地上にライオンという動物が存在することを知らないのだ。ライオンも象も、ペンギンも猿も知らない。会ったことがないのだから。自転車と自動車は知っているが、電車や飛行機、船は知らない。まして戦闘機など。世界には海や川や山があることも、そして海の方には外国、空の方には宇宙が広がっていることも知らない。

でも私は本当にそれを知っているのだろうか。

私がもし「ライオンを知らない」といったら、多くの人がぐんな顔をするだろう。いつ、どのように自分がライオンを認識するようになったのか、残念ながら記憶はない。おそらく最初は絵や写真で姿形を見せられ、実際に動物園で本物を見て、認識に到達したのだと思う。つまり私は学習して情報を持つがゆえに、「ライオンを知っている」と錯覚しているだけだ。

私はライオンを知らない。24時間で毎日人が死んでいることも知らない。

知っているのは、目の前で眠る猫たちが愛らしいということだけだ。

Ⅱ 久しぶりに会う友人と食事をしていた時のことだ。友人には小学校高学年の娘がいた。「お父さんとしては、やっぱり運動会でもビデオを撮りまわすするんですか？」と私はやや茶化して尋ねた。デザイナーの友人は、おおよそ子供のビデオ撮影に熱狂するような父親には見えなかったからだ。彼は「まあ、人並み程度には撮りますよ」と答えたあと、急に神秘的な面持ちになった。

「僕らが子供の頃って、せいぜい色褪せた写真が少しあっただけでしょう？ 3でも4も前の子たちには、子供時代の動く映像が死ぬほど残っているんです。証拠がたくさんあるから、記憶を勝手に書き換えてたりできない。記憶がずっと映像に縛られる。それはそれで、けっこう辛いことだと思ひますよ……」

小さい頃、人の昔話を聞くのが好きだった。当時としては比較的多い七人という家族構成に加え、父の工場で働く工員さんやお手伝いさん、近くに住む親戚など、我が家には常に人がひしめきあい、会話が飛びかっていた。好むと好まざるにかかわらず、私は話にまみれていた。

父が東京から埼玉へ向かう列車に乗っていた時空襲に遭い、祖父とはぐれてしまった時の話。母が勤めていた会社の工場でぐぐぐ事故があった。祖母の末弟が不慮の事故で命を落としてしまった場面。祖父が徴兵検査に合格したくないがためにどんな努力をしたか。両親の結婚式で、酔っ払った農家の親戚が式場の芝生で立ち小便をしてしまった時の、みんなの呆気にとられた顔。東京で働いていた母が久しぶりに実家へ帰る時、祖母がちよっちゃんを持って駅まで迎えに来てくれたという話……。

記憶によってしか過去を再生できない時、人は驚くべき記憶力をぐぐぐする。空から近づいてくる爆撃機。暗闇の中で崖にたたきつけられる荒波。暗い夜道をめくぐりと進んでいくちよっちゃんの頼りない灯り。4そのどれも立ち会っていないのに、私はいまでもそれらの映像を鮮明に脳裏に描くことができる。話の一つ一つの前で事実でどうかという顔色なのかはわからない。多分、そんなことはどうして重要ではない。何十年も色褪せない記憶を持っていること、それがきっと、人間が生きていく上で大きな支えになっているのだろう。

一方私はといえば、昔話をしてくれた当時の彼らより短い人生しかまだ生きていないにもかかわらず、昔をあまり鮮明に思い出すことができない。写真や手紙など、過去を証明する証拠はたくさんある。しかし記憶の鮮明さは彼らとは比べものにならない。

映像の記録が残れば残るほど、証拠に甘えて、人は記憶する努力を怠る。私も含め、そういう人たちが老いた時、どんな過去の映像を思い出すのだろうか？ どんな昔話をするのだろうか？

私たちは人類史上初めて、昔話をできない、(注④)の人間になりつつあるのかもしれない。

星野博美『迷子の自由』

注① リンクサシクの大きなもの。 注② 反対の意志を示すために食事をとらないこと。

- 問2 ――1について、「猫に見える世界」と「自分が見ている世界」とは、どのようにちがいますか。説明しなさい。
- 問3 ――2について、なぜ「知らない」というのですか。この言葉に込められた筆者の思いを説明しなさい。
- 問4 ――3の言葉を、筆者はどのような辛さとしてとらえたのですか。――4をもとに考え説明しなさい。
- 問5 I・IIの文章に共通して読み取れる、情報や記録に対する筆者の考えを答えなさい。

桜

II 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

みさきは、輝(注①)ののこしたものに、今まで一度も手をふれたことがない。大すぎだった輝(注①)だけ、持ち主のいなくなった品はうすきみがわるいのだ。でも、会えるものなら、輝にはもう一度会いたいと思う。

明るくてまぶしっていた輝。思い出はかきりない。年がはなれていって、輝はみさきをからからたりしながらも、かわいがってくれていた。

みさきのあひだであり、いちばんすきな人だった。最後に会ったときも、あのベージュエだった。洗いたての白い綿(わた)に、すこきりとあついていた。

――ローブがあたしんとにきたのも、その日やつたね。

そのとき、みさきは五年生になる春休みだった。輝は、チーズケーキをとどけにきてくれたのだ。大学の入学式にまにあうよう、あさつて東京にだつて、うれしそうにお母さんに話していた。そしてひよいと思いついたように、「そうや、ドライブつれてつたげようか」と、そばにいたみさきにいった。

「免許とりたでしよう。あふないなあ」

お母さんはちよと顔をしかめた。

「おれつて、運動神経あるし、そのうえ慎重派(じゅうじゅうしやう)なんやで。心配いらんつて」

輝は自信たつぷりにいつて、みさきをつれたした。そして、味きはじめて桜並木の道をドライブしたのだつた。

途中で輝の友だちの家によつた。そこは手づくりのおもちやの店で、ローブはそこにいた。店のすみに、ややくたびれたようすで、ローブはまっていた。

みさきとローブは目があつた。

「ひやーっ、かわいっつー」

みさきがいつと、お店のおばさんは、

「輝ちゃんのことさんだから、もう、大勉強するわ。輝ちゃん、入学祝いたくせんもらつたんでしょ。プレゼントしなさい」

と、なかば強引(きやういん)に売りつけた。それは定価(ていけ)の五分の一だった。

二十円をはらいながら輝は、「ドライブなんかさそうんやなかつた」とぼやいた。

「輝兄(あに)ちゃん、見て見て。なんやしらん、この目、輝兄(あに)ちゃんの目にくると思わん。ねっ、やさしそう」

みさきはだきしめていたローブを、輝にむけた。

「へえ、男(おとこ)まえじやんか。おい、おまえ、みさきをたのむぜ。おれの身代わりでな」

輝はローブの頭をちよんとずいた。そしてはしゃいでいるみさきを見て、にこりした。うれしそうな、満足げな輝だった。

それから一月後、事故がおきたのだつた。大学の友だち数人と多摩川の上流にあそびにいつた輝は、そこでまだつめたい川に飛びこんで、心臓麻痺(しんざうまひ)をおこし、死んでしまったのだ。

おばさんは、カッパよくてみんなの人気者の輝が自慢(まん)で、大甘(あま)だった。だから輝がとつぜん死んだとき、気がくるつたように泣きさけび、づづいて話したがらなくなり、うつ病(うつびょう)のようになった。

「なんで輝だけが死んだのよ」とおばさんはくりかえした。ベージュエをし、ビールをのんだいきおいで川に飛びこんだのは、輝だけではなかつた。たしかに軽率(けいそつ)な行爲(いゝ)ではあるが、みんなおなじことをしているのに、「なぜ輝だけ

が――」というのが、おばさんのかなしみとやり場のない怒りをいつそうちかくしている理由でもあるらしい。いつしにいた友人がたずねてきても、おばさんは会いたがらなかつた。

おじさんはそんなおばさんをひとりとしておけず、しばらく会社を休んだほしたつた。

「が解決するのよ」

とお母さんはよくいつた。二年ちかくだつうちに、たしかにすいしはあつて、明るなおばさんになつてきつもある。まわりは、やれやれとほつとしている。

でも、みさきはつちやく。それでもやつぱり死んでしまつ……。かならず――

「じゃあ、なぜ、生(い)まなくてはいけなかつたの。どうしたつて死んでしまつのに。」

……(中略)……

カウ(カウ)ターをばさんでふたりはむきあひ、話をつづけた。

「おじいちゃん(注②)、今まで、死にはつた人、まわりにたくせんいた。」

おじいちゃんになら、なんでも聞けつな気がする。みさきはそれまで心のおくそにたくしつたやくるの口をゆるめた。やくるのなかは、いくつものみさきのつちやくまがつまっていた。ローブ以外に、だれにも話したことのなかつちやく。

「ああ、もう、かぞえられんぐらいや」

おじいちゃんはわらひながら答えた。

「どんな気持ち。」

「うーん、むずかしいな」

おじいちゃんの若いころの話は、ほんとに聞いたことがなかつた。みさきの知つているおじいちゃんは、七十歳(まち)ころからだだけだ。これまではそれでよかった。でも、今、知りたい。若いころの話も、今となつて考えているのかも。

みさきはおじいちゃんのすきはほつち茶をだつて入れ、テーブルにはいんだ。

「戦争でたくせん死んだ。おじいちゃんは戦争にいつたから、目の前でせつてまでわろつた人が、爆撃(ばくげき)つけて、即死(そくし)したんも何回もあつた。よう生(い)きていつたと思つよ」

「いくつぐらいのとき。」

「二十歳(まち)過ぎや」

「輝兄(あに)ちゃん、十九歳(まち)やつたわ」

「ああ、佐々木(ささき)さんの息子(こ)せん……」

みさきが、うん、と小さくうなずくと、おじいちゃんは目をこらつた。

「おじいちゃん……」

「ふん。」

「……」わらひとなかつた。

「なにが」

「死ぬの」

おじいちゃんは、みさきの目を見た。そして、くちびるをかみ、うーむ、とうめくような声をもらした。

致

ታሪክ፣ ልማትና ሥልጣን

「あかーん」

むずかしい、みええはわかるような気がした。

「11.2.24.26」

みちおはじっとしてた。それについて二年間のわだちだ。みちおはじっとお  
しうちやんを叩くめだ。おしうちやんちそんな思ひで毎日をすくすくしてまゐ  
る。

「うほ、うほ、うほ、茶の香りがたまりやうだ。」

「おひさし」

[illegible]

25

おじいちゃんもじみじみとした目で、みちをながめた。

「七ノ下、四ノ下、五ノ下」

みちまは、今生きる理由を、おじいちゃんはどう考えているのかを、知りたい。

「それ、わかった？」

「おかしな話に思ふ」

「たぐひなし」

おじいちゃんはわらって答へなかつた。でも、はつきりといふやうに答へを見つけた、とその顔に書いてあるやうにおちついた笑顔だ。

「あたしの友だちの睦ちゃん、神戸の家ができたんで、春休みにひっこしやねんて」

その話をし、どうしようというわけではなかった。でも、おじいちゃんはおどろいた。

「そい、ちびっになるなあ。だけど、死にわかれるんやないし、いつでも電話で話したり、手紙だしたり、会<sup>あ</sup>つたりできる。まああたらしい友だちもできる」

「わがてゐる。死んだら、しまふやけさ」

[illegible]

Aみゆきは顔をあげ、おじいちゃんを見た。

「わからんのや、人の役割ちゅうもんはな、あんがい本人が知らんとて、はたしてることが多いんとかがうかなあ。死んでから役に立つこともあるで。みさきのお父さんとお母さんはな、友人のお葬式で知りおうて結婚したんやで。死んだ人が結びの神というわけや」

「くや、知らんかったわ」

「よいいわれることやけど、芸術とか学問とかはいつまでも生きて、人の幸福に役立つやろ。からだは死んでも、精神は生きてくれる、つことやるな。  
2つとりの人間の二の世の役割とかは、人間にはわからん、ということが、  
ぼくにもわかってきた」

おしこちゃんがかいなのない、千太郎ちゃんがかいなのない、  
うがない。みんなさんへおあい。うわ。

「子ども時代はくくな時代やな。みちをみだいに、ものごとをより感じてる子、考える子は、あついでいへることも多いやろって思う。そやけどな、それもむだやない。むたないとはなんにもない、そない思うようになつてくれたや」

みれば酒をかづけしおのちやんを見た。

「おじいちゃん、今、つくづくそう思う。生きてよかった、そう思う。最後の最後にええことがあった」

我らに於ては、 $\frac{1}{n}$ なる

「人は死ぬ。早いからおそいはあるけど、かならずやってくる。じつに公平や。そやけどな、それがいつというところが、だれにもわからん。これはすーいーつちやで。そんなんわかつたら、おそろしゅうて生きてなんがおれるか。がんばつたりできるか」

日みえ光は顔をあげ、おじいちゃんを見つめた。

「な、知らんといふのはよいです。いつ死ぬか、死んだとしないなるか、そんなこと、人間のなんぞいで知ろつちあつのはやな、ですまたまねや、とこのころ思うねん。それより、かならず死ぬということだけをまづこころのかたすみにおいておいて、毎日たのしゅうにすゝしたらええ。それが、いのちもろつた生きもんのせなあかん」とやないかなあ。そら、いやなこともあろうが、それも生きてる証拠。死ぬのも、生まれたからあるとや。生まれなんたら、死ぬこともない」

[illegible]

大谷美和子 『ひかりの季節に』

注① 輝は母方のふじりである。

注② 父方の祖父。明石のおじさんの家からいとの受験が終わるまでみなとぎの家に来ている。

問 1  にあてはまる語を漢字・二字で考えて答えなさい。

問2 ―「1」について、なぜ「みちき」は「心もとないくらいするくらいでいい声」になったのでしょうか。説明しなさい。

問3 ― A・Bのとき、「みさき」はどのように思っていたのでしょうか。そのときの「みさき」の心の声を想像して、「 」に入るように一五字以上一〇字以内で答えなさい。(句讀点をふくむ)

問 4 「おじいちゃん」は——2をよめて、——3「知らんといふ」は「どういふや」と言っています。そのから、「おじいちゃん」がどういふに考えているかわかりますか。——100字以内で説明しなさい。

|     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問 5 | 問 4 | 問 3 | 問 2 | 問 1 |
|     |     |     |     | a   |
|     |     |     |     | b   |
|     |     |     |     | c   |
|     |     |     |     | d   |
|     |     |     |     | e   |

[illegible]

には記入しない。